

「由良港と成ヶ島」

兵庫県洲本市

由良という地名には、「波に押された砂が狭い平地を平らにする」という意味があるという。

日本書紀「応神天皇三十一年の条」には『枯野(からの)を 鹽に焼き 其(し)が余り 琴に造り 搓き弾くや 由良(ゆら)の門(と)の 門中(となか)の海石(いくり)に 触れ立つ なづの木の さやさや』という歌の記述がある。

伊豆の国から献上された「枯野」という船が壊れてしまい、船材を薪として塩を焼くことにした。焼け残った余りの材から琴を造らせて弾いてみると、由良の瀬戸の暗礁にゆらゆら揺れて立つ水に濡れた木のように、冴えた音色を出したので、天皇が上の歌を詠んだということである。

「由良の門」とは、淡路島の洲本市由良と和歌山県由良町の間にある紀淡海峡の事である。同じ地名が、新古今集の一首にも登場するが、こちらは京都府の舞鶴市と宮津市が接する由良川の河口付近であるという説もある。いずれにしろ、古くから人の営みがあったという事である。

由良は中世より、瀬戸内海屈指の海運基地としても知られ、城下は大いに賑わっていた。領民の多くは、夫が漁に出て魚をとり、妻は流れてくる「いぎす」という海草(寒天の一種)を集めて売るという漁業と密接に結びついた生活をしていた。

阿波藩の蜂須賀至鎮が淡路を領すると、由良は淡路を支配するに立地が不適と判断され、寺院や政庁、商家など、洲本に中心の機能が移された。このことを「由良引け」と呼び、4年をかけた大がかりなものであったという。

成ヶ島一帯は、遠望では「淡路橋立」と呼ばれるほどの絶景であり、ハマボウ、ハママツナといった絶滅危惧植物が自生している。

島の北側にある成山に成山城があったとされているが、今はその遺構はない。幕末から太平洋戦争終戦までは陸軍の要塞があり、その跡が残されている。



淡路橋立



- 洲本城：洲本城は、昭和天皇御大典記念として建てられた日本最古の模擬天守であり、加工しない自然石を横位置に二十数段穴太積みされている石垣には、往時を偲ばせるものがある。また、展望台から一望できる景色も素晴らしい。